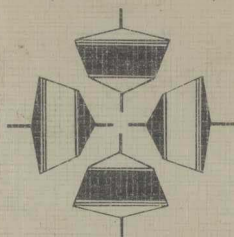


人形佐七捕物帳シリーズ=6

# 団十郎びいき

横溝正史



講談社

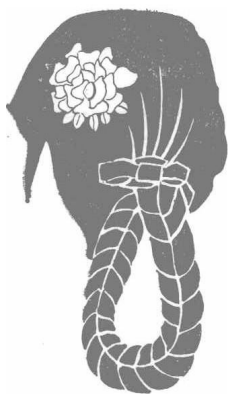
目次

団十郎びいき	九
風流六歌仙	三三
怪談閨の鴛鴦	五九
万引き娘	八三
括り猿の秘密	一〇三
銀の簪	一二九
夢の浮橋	一五五
藁人形	一七五
夜毎来る男	一九五
本所七不思議	二二五

沖帳シリーズ=6

# 団十郎びいき

横溝正史



講談社

装 幀 眞 鍋 博

挿 画 岡 本 爽 太

カラー写真 筑 井 昭

カラー写真のコマ

(米沢市白布高湯やまなしゴマ)

提供 鈴 木 常 雄

人形佐七捕物帳シリーズ(6)

団十郎びいき

昭和40年6月18日 第1刷発行



著者 横溝正史  
発行者 野間省一  
印刷所 共同印刷株式会社  
製本所 藤沢製本株式会社  
発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽町3ノ19  
振替東京3930  
電話東京(942)1111 (大代表)

270 円

◎ 横溝正史 昭和四十年

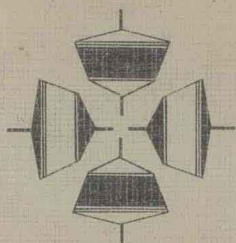
(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします) Printed in Japan



人形佐七捕物帳シリーズ=6

# 団十郎びいき

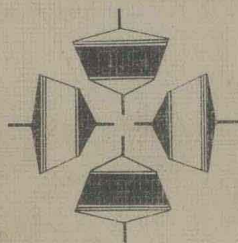
横溝正史



講談社







装 幀 眞 鍋 博

挿 画 岡 本 爽 太

カラー写真 筑 井 昭

カラー写真のコマ

(米沢市白布高湯やまなしゴマ)

提供 鈴 木 常 雄

団十郎びいき

## 辰と豆六大口論

——お国自慢に花が咲いて——

「ちよつ、いわせておけばべらべらと、豆六、なるほどでめえは上方もんだから、大阪びいきもむりはねえが、なんといつても江戸は天下のお膝下、大阪なんかにねえもんがいくらでもあらア」

「こらおもしろい。お江戸にあつて大阪にないもんちゆうたら、兄哥、どんなもンヤ」

「そうよ、まずだいいちが浅草の観音さま、ご本尊は一才八分の小粒でも、玉のいらかの本堂は、東西十七間二尺、南北十五間五尺四寸というごうきなもの。昼夜宗旨のしゃべつなく、ご参詣の善男善女がたえねえというにぎやかさ。豆六、こんなけつこうなお寺が大阪にあるかえ」

「あほらしい。大阪には四天王寺さんちゆうて、そらありがたいお寺がおまんがな。境内はまず東西が八町、南北が六町、二万石千坪にあまるといひひろいもンヤ。なかには金堂、講堂、五重塔、二王門に廻廊、猫門、太子堂に鐘樓、石の舞台——と、ああ、しん

ど、それはそれはけつこうなもンヤ。兄哥、どんなもンヤ」

「こん畜生、口のへらねえ野郎だ。それじゃ、豆六」

と、さあ、こうなるときりがない。

おなじみの神田お玉が池の佐七のうちでは、ふとしたことから江戸大阪の自慢くらべがはじまって、巾着の辰とうらなりの豆六の両雄が、口角泡をとばし、舌端火花をちらしている。

自慢のたねは名所くらべからはじまって、食物くらべ衣裳くらべ、さては四季の遊山くらべと、いよいよ高潮にたつしたが、やがて辰はせせらわらい、

「こうこう豆六、いわせておけばべらべらと、かつてな熱をふきやアがるが、それじゃきくが、大阪にや三座のような芝居があるかえ。芝居といやア江戸のはな、役者もあまたあるなかで、随市川の団十郎といやア、日本第一、荒事の開山だ。そんな役者が大阪にあるかえ」

「あほらしい、いま江戸で日の出の人気役者中山歌七、あれはいつたいどういふ役者や。もとはといえは大阪役者、あの歌七が大阪からくだってきてからちゆうもンは、江戸の役者はかたなしや。荒事の開山かなんか

# 暫

写清長



しらんけど、顔じゆう、べたべた塗りたくって、あら  
なんです。まるで唐人の化もんやおまへんか」

「なによ、コン畜生」

「わっ、兄哥、なにすんねん。口でいいまけたさかい  
ちゆうて、手をだすという法がおますかいな」

「あるもねえもあるもんか。よくも団十郎をけなしや  
アがった。こうしてくれるわ」

と、たいへんなことになったもので、お国自慢がこ  
うじたあげく、あわや、掴みあいのはじまろうとする  
のを、見るにみかねて女房のお衆。

「辰つあんも、豆さんも、なんだねえ。ばからしい。  
子供じゃあるまいし、たいがいにおしなねえ」

「だって、姐さん、こいつ生意気じゃありませんか。  
お江戸の飯をくいながら、よくも団十郎の悪口をぬか  
しゃアがった」

佐七もわらって、

「まあ、いいからさ。そんな手荒な真似をしちやアみ  
つともねえ。豆六も豆六だ。お国自慢もいいが、郷に  
入っては郷に従えということもある。あんまりなこと  
はいわねえもんだ」

「へえ、すみまへん。つい調子に乗りすぎました。兄

哥、気にさわつたらごめんやすや」

「はっはっは、なに、てまえがそういうンなら、おいらもなにもいうことはねえ。豆六、おたがいにお国自慢もいかげんにしようぜ」

と、そこは気のあつた同志の兄弟分、親分夫婦の仲裁で仲直りが成立すると、あとはさばさばしたものである。

佐七はわらいながら、

「ひいき役者のためにヤアとかく、喧嘩口論もおこりがちなものだが、それがひいきのひきたおしで、かえつて役者のためにならねえ。それに團十郎と中山歌七も、ついこのあいだまでは人気争いがひどかったが、こんどはいよいよ和解して、市村座で初顔合せをするというじゃねえか」

「そうそう、狂言もきまつて看板もとつくに上りましたが、しかし、親分、こう初日がのびのびになっているのは、どういうわけでございますようねえ」

「ほんにそれや。なんやまた、ごたごたがあつたちゅう評判だつせ」

と、三人のふしぎそうな噂話もむりもない。

そもそも中山歌七と、團十郎の人気争いは、ちかご

ろ劇界での噂のたねだった。

中山歌七というのは、さつき豆六もいったとおり、もとは大阪役者だったが、十年ほどまえにくだつてくると、たちまち江戸の人気を独占してしまった。

大阪役者にはめずらしく、歌七の芸はさらりとしていて、踊りでござれ地芸でござれ、行くとして可ならざるなき達者さだったから、これが江戸の人気にとりじて、当時日の出の人気役者、芝居道の清盛入道とさえ評判された。

さあ、こうなると負けン気のつよい江戸っ児はおだやかでない。

なんとかして江戸役者をおしたてて、歌七に拮抗しようとなつたが、あいにく当時の江戸には、歌七とはりあえるような役者はひとりもなかった。

江戸随市川の團十郎も、歌七がくだつてきたころはまだ十九歳、團十郎の名跡をついでいるとはいへ、芸もわかき舞台の貫禄もひくかった。

かくて歌七は十年間、江戸の舞台に君臨してきたが、そのうちによく頭をもたげてきたのが、江戸っ児のホープ團十郎、いまや押しもおされもせぬ、りっぱな役者になつたから、さあ、こうなるとふたりの

人気争いはものすごい。

團十郎には代々のよしみで魚河岸の連中が尻押しする。

歌七のほうには上方出身のおおい、小田原町あたりが後援するというわけで、両優のあいだには、火花をちらす競争がつづけられたが、それがこのたび、仲にはいるものあり、いよいよ初顔合せという段取りとなつて、狂言も兎雷也。

團十郎の兎雷也に、歌七の大蛇丸と役もおさまり、市村座はたいした前景気だったが、それがいつまでたつても初日が出ないから、そろそろ妙な噂がたちはじめた。

いまでもいとて三人が、そんな話をしているところへ、

「ごめん下さいまし」

と、入ってきた男が、

「わたしは市村座の帳元、勝五郎と申すものでございますが、こちらの親分においてのお願いがございまして——」

と、噂をすればかけの挨拶、

佐七をはじめ辰と豆六、おもわずおやと顔見合せ

た。

## 両優番附争い

——團十郎に由縁の品がズタズタに——

「おお、これは親分さんでございませうか。とつぜんでございませうが、じつは少少芝居のほうに、困ったことがございまして——」

と、苦勞ありげな勝五郎のかおいろに、佐七も膝をすすめた。

「帳元さん、じつはいまも、こいつらと、噂をしていたところですが、市村座はどうしてこんなに、初日がおくれているのでございませう」

「じつはそのこととございまして——なにがさてあのとおりの人気さかんなおふたりさん、ひいきもむつかしゅうございませうので、番附などもひととおりの苦勞ではございませう。やむなく番附をふたつにわりまして、いっぽうの座頭は歌七さん、もういっぽうは團十郎さんの座頭と、これでようやく納めました。さて、絵番附という段取りになって困りました」

狂言が兎雷也だから、絵番附には兎雷也の妖術、轟

を大きくかくのがふつうである。

ところが、そこへ歌七のひいきから槍がでて、大蛇が墓を巻いているところにしろと、捻じこんできたのである。

ところが、これをきくと団十郎びいきのほうでもだまっちゃいない。

「べらぼうめ、兎雷也の狂言で墓を大きくかくのはあたりまえのことだ。いいからひとつ、大蛇を踏んまえているところにしてくれ」

と、芝居にむかって強談判。

困ったのは座元だ。

「どちらの顔をたてても、こうなっちゃひと騒動まぬかれませぬ。すったもんだといってるうちに、初日が延引いたしまして——」

と、勝五郎は暗いおをした。

「なるほど、それはお困りでしょうが、しかし、帳元さん、いかにひいきとはいえ、番附にまで口をいれるというのはどんなものでしょうか。いったい、そんなわからないことをいうひいきというのは、どのだれでございます」

「それが、歌七さんのほうは小田原町の浜辰さん、団

十郎さんのほうは魚河岸の伊豆寅さんで」

と、聞いて佐七は辰や豆六と顔見合せた。

小田原町の浜辰というのは、浜田屋辰右衛門という道中師の親分、魚河岸の伊豆寅というのは伊豆屋寅五郎といつて、これまた魚河岸きつての顔役。

どちらも血のけのおおいわかい者を、おおぜいかかえている親方のこと、どちらの顔をつぶしても、しよせん、ひと騒動はまぬかれぬ。

「なるほど、それやお困りのことはじゅうじゅうお察しいたしますが、しかし、帳元さん、いったいこのあつしにどうしろとおっしゃるンで。いかにあつしでも、魚河岸と道中師のなかに立って、口をきくほどの顔じゃありませんからねえ」

と、佐七がわらうと、

「いえ、お話というのはまだこれからで」

と、勝五郎が、顔をしかめて語るところによると、こうしてひいき役者のことから、浜辰と伊豆寅が、すったもんだの嘘みあいをつづけている折柄、ゆうべ、たいへんなことが起つたのである。

「ゆうべ、伊豆寅さんがお斬られなすつたンで」

と、きいて佐七もおどろいた。



「えつ、伊豆寅さんが斬られたと。そして、死んでしまったんですか」

「いえ、さいわい傷は浅傷あかまでございますが、お聞きくださいまし。かようでございます」

伊豆寅にはお町というおもいものがあって、これを鐘突新道にかこつてあつた。

伊豆寅はほとんど毎夜のように、そこへ出むいて寝とまりすることになっているが、ゆうべの真夜中、その妾宅へしのびこんだ曲者があつた。

がさ、ごそとうちのなかを掻きまわす物音に、妾のお町がまず眼をさまして、さっそく伊豆寅を呼びおこした。

伊豆寅はもとより気丈な男、おのれ生意気な泥棒めと、くらがりのなかで組みついたが、あいてはやにわに斬つてかかつて――。

伊豆寅に二、三カ所薄傷をおわせて、そのまに逃げてしまったのである。

「なるほど、それじゃ曲者がどういうやつか、わからぬのでございますね」

「はい、しかし場合が場合ゆえ、浜辰さん一味のものにちがいないと、朝からたいへんな権幕で――」

「しかし、それやすこし早がてんがすぎるンじゃありませんか。なにも泥棒がしのびこんだとして、浜辰一味とはかぎらないでしょう」

「いえ、ところが少々おかしいことがございますので――」

伊豆寅というのは有名な団十郎びいきで、その妾宅なども、すっかり成田屋にちなんだ造作にしてあるくらい。団十郎に縁のあるものならば、絵であろうが字であろうが、かたっぱしからあつめて喜んでいう熱心家。

「ところが、朝になって気がついてみますと、その団十郎さんにゆかりのある品が、かたっぱしからぶつ毀してあるんだそうで――」

「へへえ、それは――」

と、佐七はにわかに興をもよおしたらしく膝をすすめた。

「なるほど、それで浜辰一味のいやがらせと、こう思ひこんだわけですね」

「へえ、さようで、ですからこの返報はきつとせにやアおかぬと、魚河岸はけさからたいへんな騒動。これをきいて浜辰さんのほうは、身におぼえのないことだ